報告

日本天文学会 2003 年秋季年会・天文教育フォーラム

「就職：採用する側とされる側のミスマッチ — こんな人材がほしい」

矢治 健太郎（かわべ天文公園）

9 月 26 日(金)、日本天文学会秋季年会において、天文教育フォーラムが行われました。今回は「就職：採用する側とされる側のミスマッチ—こんな人材がほしい」というテーマで行いました。

現在、若手研究者の人口が急激に増加しており、研究職への就職はとてもきびしくなっています。その状況にあって、天文学者のいなかった教育系大学、私立大学、地方大学で職を切り開き、活躍している人々がいます。また就職したら研究だけやっていればいいという部署はほとんどありません。つまり、研究しかできない、研究しか興味がないという人は理想的な候補ではありません。では、研究能力以外には、どのような能力が求められているのでしょうか？このフォーラムはそれを考えるための材料を提供する機会となりました。

会場には 200 名近い出席者があり、学生の出席者も目立ち、就職問題への関心の高さを伺わせました。

本フォーラムでは、以下の 3 名の方々に講演していただき、そのあと議論となりました。

1. 私立大学編：「教育と研究を楽しむ方法」
   比田井昌英(東海大総合教育センター)
2. 地方大学編：「地方大学における研究教育環境」
   山内茂雄(岩手大学人文社会科学部)
3. 公開天文台編：「公開天文台で欲しい人材の理想像」
   綾仁一哉（美星天文台）

東海大学の比田井さんは、現代の社会において、教育の多様性・質の向上が求められる中、学生をどのような人材に育てるか、という点を意識して話されました。大学の授業では、教養科目として「人間と宇宙の認識」、専門科目として「太陽の科学」「宇宙観測工学」など、ゼミを含めると週 11 コマの授業を受け持っているとのことでした。卒研指導・大学院生指導も行っているが、学生の数が少ないのでゼミが成立しないのが悩みとのことです。そんな中、「専門外のことを勉強する」「学生を鍛える」「知を伝える」「理科離れ・理科嫌いをなくす草の根的な運動を行っている」といったことが楽しみである、といった話しをされました。若手研究者に求めるものとして「教育義務を果たせるか？」「研究環境を了解できるか」「組織内でうまくやれるか？」などをあげて、「私大でもなんとかできる」を最後のメッセージとして、しめくくりました。

岩手大学の山内さんは、教養部を母体として設立された人文社会学部に所属しています。授業は、全学共通教育科目(天文はここだけ)、自然科学基礎科目、環境関連科目のほか、文系向け授業を担当しています。1 教官で 1 研究室を運営をしているため、学生指導はもちろんのこと、計算機環境の設定も全部一人で行わなければならないとのことです。しかも、卒業研究学生は天文学志望とは限らない。こういった教育活動と平行して研究をすすめるために、時間を有効に利用する、積極的に外を出て、他の研究者と交流して刺激を求めることを心がけているという話をされました。

美星天文台の綾仁さんは、まず公開天文台

の仕事として、「観望会」「星座案内」「望遠鏡の保守管理」「観測」「研究」「イベント企画」「普及広報」「学校・対外協力」「管理・事務」「設備管理」などをあげて、一般市民向けの業務が非常に多岐にわたることを紹介されました。公開天文台の新人採用の話しでは、職員事情は施設によってさまざまだが、新人採用時にはバランスを考慮するとのことでした。公開天文台の職員に求められるものとして、「天文への情熱」はもちろんのこと「幅広い分野への関心」「天文普及への信念」「技術力・技術センス」「望遠鏡への愛情」「話し上手」「協調性・柔軟性」「子供好き」「サービス精神」などをあげました。そんな中、研究に対する周囲の理解不足にめげない、ということも強調されました（図１）。

日本天文学会から「天文学に関する社会教育施設の充実」という要望書が発表されたところだったので、綾仁さんの話は公開天文台の実情を天文学会会員に知ってもらういい機会になったと思います。実際、会場からの質問も活発で、「公開天文台の場合、事務職や行政職という立場で採用されていることが多いが、科学研究費の申請は行えるのか」「光学望遠鏡の操作経験が求められるというが、光学天文学以外の出身者はどうなるのか」などの質問がありました。

また、３人の講演のあとの議論では、坪井陽子さん(中央大学)から「私大への就職をアピールするために、積極的にトークをして売り込んだ」とか、川畑周作さん(元京都学園大学)から「2，3 年で出ていくのではなく、10 年ぐらい腰を落ち着けて、いてくれる人材が求められている」というコメントがありました。

ひと昔前と違って、いろんな大学で、地方大学の教官になる天文関係者が増えてきました。その反面、研究室運営や授業計画などになどに思い悩む方もいるかと思います。その意味では、今回のようなテーマは、各大学の教育事情・研究事情を知るよい機会になったと思います。また、形を変えて、大学教育をフォーラムのテーマに取り上げてもいいかもしれません（図２）。

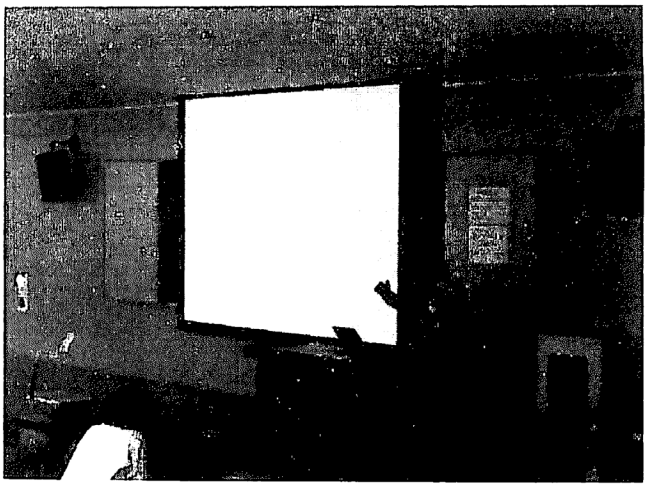

図１　綾仁さんの発表の様子

図２　会場の様子